

春秋彩

Syunjusai

特集 「大学 COC 事業」への取り組み 2

活躍する卒業生	7
国際交流	8
研究活動紹介	10
大学の動き	12
後援会便り	13
活き活き元気種	14
熊本県立大学未来基金寄付者ご芳名	15
人事情報	15
おすすめの 1 冊	15



 熊本県立大学

春秋彩とは

万葉集の額田王の春秋を論じた歌の題詞「春山の万花の艶と秋山の千葉の彩」から採ったもの。「春秋」には年月の意味もあり、「春秋に富む」若者を彩る学園の四季を表している。

熊本県立大学広報誌

2014 AUTUMN

vol. **41**

あいさつ



学長
古賀 実

熊本の豊かな自然をもとに育まれた地域社会、歴史文化を学び、人々との協働の精神を学ぶ「もやいすと育成プログラム」がスタートし10年が経過しました。今年は雨の間隙を縫って七十数名の「もやいすとジュニア」が野外活動—防火帯作りに汗を流して作業に当たってくれました。地域を学び、課題に直接触れ、地域と一緒にあってその解決方策をさぐる活動は流行の課題解決型学習（PBL）あるいはアクティブラーニングに通じる先駆的な教育だと考えます。これは、「熊本県全土をキャンパスに」を合い言葉に展開する「里山、里地再生活動」、「くまプロジェクト」、「地域連携型卒業研究」や様々な活動に発展し、地域を題材とした本学の特色ある教育活動として定着してきました。

今年度、こうした取組みの成果が認められ、文部科学省「地（知）の拠点事業（大学COC事業）」に採択されました。地域社会の英知を結集し、若者の育成をはかり、合わせて地域の再生、創造に積極的に取り組むCenter of Communityとして本学は期待されています。地域の方々の温かいご支援のもとに、教育活動の一層の充実を図って参ります。

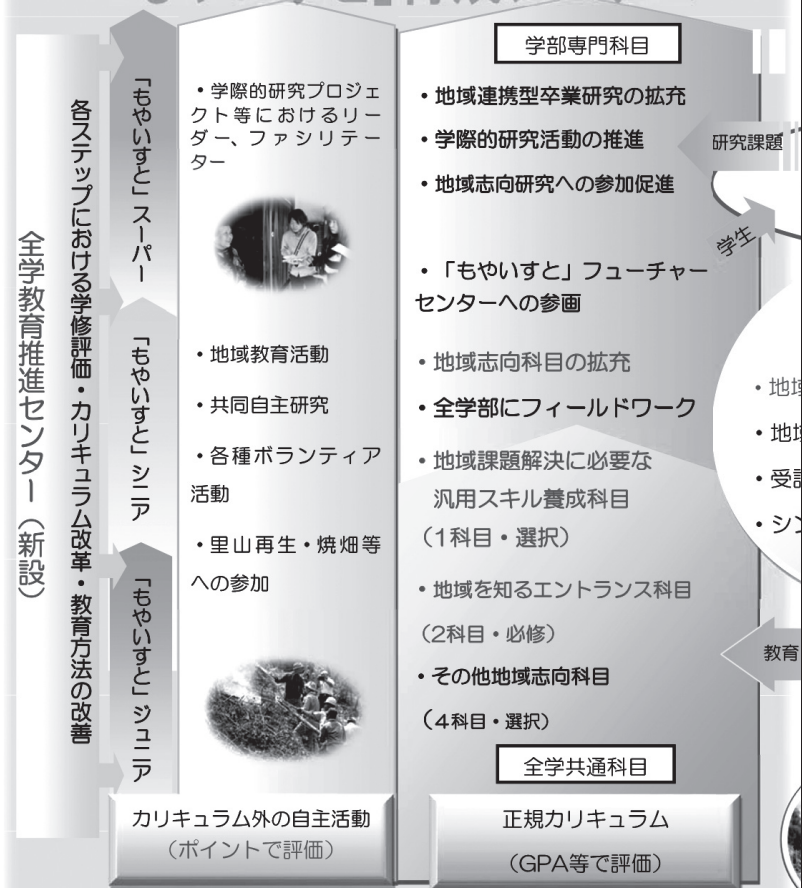
特集

「大学COC



もやいすと育成プログラムで学んだ阿蘇の地域課題を報道番組風に発表する学生

「もやいすと」^{*}育成と産官学民の 「もやいすと」育成システム



COC事業」への取り組み

文部科学省
地(知)の拠点



学生、教職員、自治体職員等を交え、学内で初めて開催したフューチャーセッション

事業概要

大学COC事業では、教育、研究、社会貢献の3分野で、地域と連携した様々な事業に取り組みます。

まず、教育分野について、本学は従来から「熊本の自然や文化、社会に対する理解に立ち、専門の枠を越えて、自ら課題を認識・発見し、地域づくりのキーパーソンとして地域の人々と協働して課題に取り組む人材」を、船を相互に繋ぐ「もやい」から「もやいす」と定義し、地域を理解し、共生の精神やボランティア精神を学び、自ら地域の課題解決に取り組む学生を育成する独自の教育プログラム「もやいす」と育成プログラムに取り組んできました。

COC事業を通じて、共通課程の選択科目の一つであった同プログラムを、全学生が履修する必修科目として再構築し、専門課程における地域志向科目の拡充と合わせ、4年次までフォローアップする一連の教育プログラムへ発展させます。

また、学外における様々な地域貢献活動や自主研究等も人材育成の一環と位置付け、従来のGPAでは測れない、それらの学外活動を評価する新たな評価制度を導入し、学生の自主性や地域への関心を高めていきます。また、これら正規カリキュラムや学外活動の教育効果を測る新たな学修評価システムと組み合わせることによって、持続的な教育改革を可能とする「もやいすと育成システム」として体系化します。

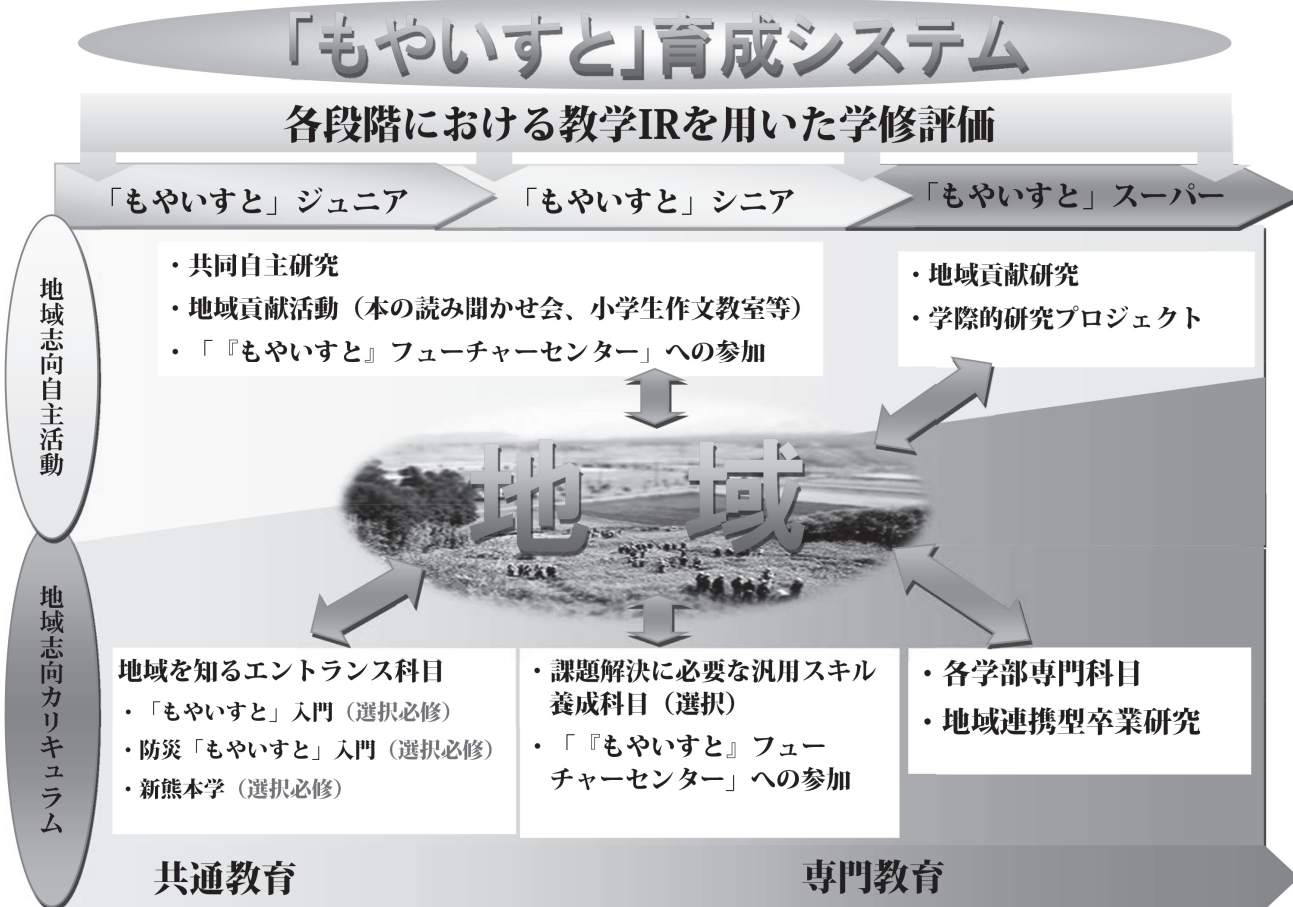
研究分野では、従来からの「地域貢献研究事業」に加え、新たに連携自治体が抱える課題をテーマとした教育・研究・社会貢献活動を支援する制度を新設し、地域を対象とした教育研究を推進していきます。

社会貢献分野では、地域ニーズを受け止めるため、多様なステークホルダーが集う「『もやいすと』フューチャーセンター(セッション)」を学内外で開催し、ここで得られた課題解決に向けたアイデアやインスピレーションを研究現場や地域へと還元し、地域と大学双方のシーズを活用しながら協働で課題解決に取り組むサイクルを生み出していきます。

対話と協働で拓く地域の未来



上記3分野における取り組みから派生する様々な教育・研究成果や、地域活動自体が、直接的に地域再生や地域活性化に寄与するものですが、地域と連携した様々な取り組みに学生を参画させることで、高い課題解決能力・実践力を培い、次代の地域産業や行政の担い手として送り出すことが、本学に最も求められている地域貢献と考えています。



「フューチャーセンター」って何？

「フューチャーセンター」とは耳慣れない言葉かと思えます。何かハコモノのようなイメージを抱かれるかもしれませんが、実際、ハコモノを指すケースもあります。

その起こりは、北欧の保険会社において、経営者間の創造的な対話を促すために考案された、ロケーションやオブジェといった舞台装置や、ホスピタリティやファシリテーションに工夫を凝らした「対話の場」を指す概念です。昔の「茶室」のようなイメージですね。

やがてその手法が欧州各国の公共機関を中心に広がり、日本では企業が先行する形で導入されてきましたが、近年、東日本大震災後の地域再建に際して、住民間の対話を通じた街づくりの手法として取り入れられ一般にも認知されてきました。

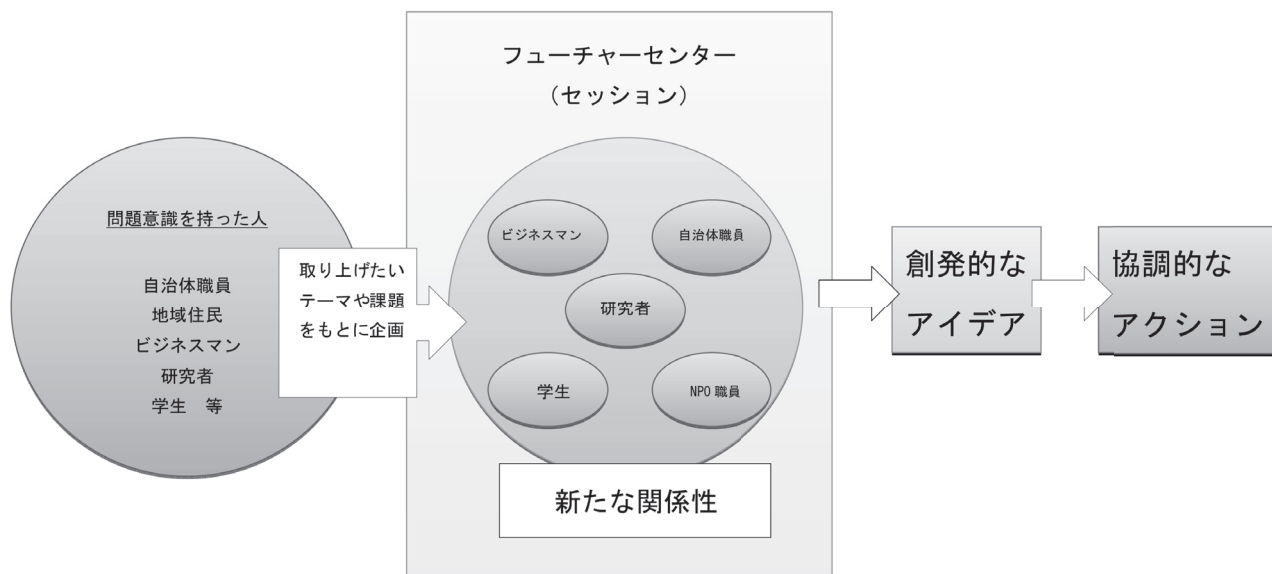
「フューチャーセンター」とは、文字通り専用空間としてのセンターを指す場合もありますが、何らかの課題が持ち込まれ、その解決に向けた対話が開かれ、具体的な行動が生

まれるまでの一連の流れを生み出す機会やシステムを指すこともあります。

大学COC事業では、大学が地域との対話を通じて地域の課題やニーズを汲み取り、そのシーズを活かして課題解決を図ることが求められており、本学では、その「地域との対話の場」として、この概念を取り入れ、多くのステークホルダーが集う「もやいすとフューチャーセンター（セッション）」を学内外で開催します。

勿論、ただ寄り合っただけでは、課題解決の糸口も生まれようがありません。より質の高い問いかけや対話を促すための様々なファシリテーションスキルや運営ノウハウも必要となってきます。

対話を通じて明確化した地域のニーズや課題を、本学の教育や研究課題として取り入れ、その成果を様々な形で地域へ還元するとともに、参加したステークホルダー自身も、それぞれの立場で課題解決に向けたネットワークづくりや



アクションを起こすことによって、地域においてもイノベーションの連鎖反応が広がることを期待しています。

また、対話を通じたイノベーションを起こすうえでは、既存の方法論や固定観念にとらわれがちな大人よりも、むしろ自由な発想力を持った学生達に期待しています。学生が

積極的にセッションに参加し、社会人とコミュニケーションを図りながら地域の課題に向き合うことで、地域理解も深まり、協調性や実践力も培われる等、高い教育効果が得られるものと期待しています。

「くまもと県南フードバレー構想」の推進

「くまもと県南フードバレー構想」とは、県南地域の豊富な一次産品等を活かした食関連企業・研究機関等の集積や生産性の向上とブランド化、国内外への流通拡大等を推進する、熊本県の重点政策の一つで、地域経済が低迷する県南地域振興の起爆剤として期待されています。

本学は、女子大時代から現在に至るまで、食品化学や栄養学に関する教育研究が盛んであり、それに加え、流通や経営、情報通信等、社会科学分野の多様な研究シーズも活かすことで、同構想の推進を支援し、地域に貢献したいと考えています。

とはいえ、大学で誰が何を研究しているのか一般には広く知られていないため、積極的に自治体や地域へ情報を発信していく必要があります。

昨年12月に、本学において、県フードバレー推進室との情報交換会を開催し、本学の研究シーズとして、マイクロナノバブル発生装置を使った養殖技術や、食品の機能性分析、ITを使った農業経営の合理化等のシーズをご紹介しました。

今年9月には、フードバレー構想の拠点都市である八代市において「フードバレーフォーラム」を開催(共催:八代市)し、研究シーズの紹介やパネルディスカッション、ポスターセッ



ションに、行政や農業、企業関係者等200人以上のご参加をいただきました。

また、今年度から、フードバレー構想の推進に寄与する各種調査・研究事業に対する独自の研究支援制度「熊本県立大学県南フードバレー構想関連研究」を創設し、研究分野における貢献を加速させています。

今後は上述のフューチャーセンターも活用することによって、より個別的、具体的な課題や地域ニーズ、市場ニーズに対する効果的なマッチングや学際的なアプローチを図っていきます。



「COCについて」

COC推進室長
松添 直隆

熊本県立大学は、文部科学省から「地(知)の拠点」(Center of Community、略称COC)に選定されました。本学は従来から地域との結びつきを重視し、各種の地域貢献事業に積極的に取り組んできましたが、今回選定されたことによって、それらの事業を飛躍的に発展させるとともに、いままで以上に地域と連携して、地域の再生・活性化に貢献するための土台を築くことができました。大学の使命として、教育・研究・社会貢献があげられます。この3本柱のすべてにわたって、地域指向を目指します。もちろん、グローバル化への対応も重要です。本学は「地域に生き、世界に伸びる」をモットーにしています。

地域の実情を熟知するとともに、世界の動きを知り、異文化を理解し、グローバルな視点をもって海外の人々とのコミュニケーションを図ることができる人材こそが、地域

活性化に貢献できるからです。

「地(知)の拠点」整備事業は、平成25年度から文部科学省が全国の大学等に呼びかけて推進してきました。その背景として、少子高齢化、人口減少、過疎化、国際競争の激化等の変化に対応するために、主体的に考え・行動できる人材、異なる言語・世代・立場を越えてコミュニケーションできる人材が求められていることが挙げられます。大学はそのような人材を社会に送り出すこととともに、地域再生の核となること、生涯学習の拠点となること、社会の知的基盤としての役割を果たすこと、さらに世界的な存在感を発揮すること等が求められています。

「地(知)の拠点」整備事業は、そのような要請に応えることができる大学になるために全学的・主体的に改革を行う大学の中から、特に優れた取り組みを行う大学を文部科学省が選定し支援するものです。今年度は応募件数237件中、採択されたのは25件、その内、公立大学で採択されたのは本学を含む2大学のみでした。事業期間は平成26年度から平成30年度までの5年間ですが、最終年度終了時点では全学的に真に「地(知)の拠点」となっていることが求められています。

さっそく本年度から本学は、関係自治体や地域の企業や地域の皆様等と連携し、地域に求められる人材の育成と地域課題の解決に取り組んで参ります。

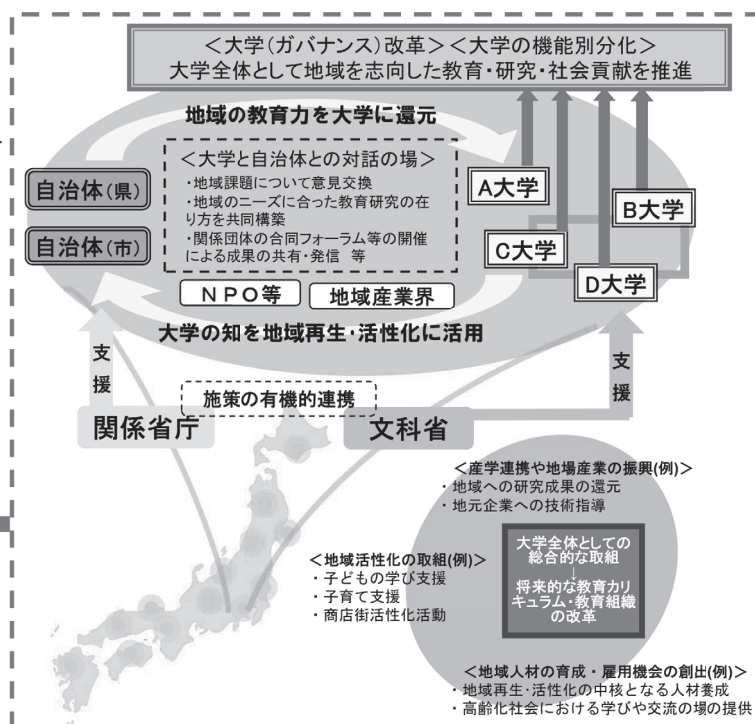
<COC(center of community)機能について>

大学の役割は、**教育と研究と社会貢献**

COC機能は**全ての大学に求められる機能**

その中で**事業目的に照らして特に優れた大学を重点的に支援**

「**地(知)の拠点整備事業**」



活躍する 卒業生



広島大学大学院国際協力研究科 准教授 牧 貴愛 (まき たかよし) さん

熊本県立大学総合管理学部総合管理学科(国際関係論研究室)2001年卒業。
広島大学大学院教育学研究科教育人間科学専攻博士課程後期修了。博士(教育学)。
2014年9月より現職。主著『タイの教師教育改革—現職者のエンパワメント—』
(広島大学出版会、2012年)。

◆ 予測不可能な人生

学部4年生の頃、1年生に混じって教養科目の講義を受けていた私が「活躍する卒業生」として寄稿する日が来るとは思ってもみなかった。恩師、総合管理学部の高埜健先生が「人は変われる」という例として私のことをゼミで紹介していると冗談交じりに話して下さったことがあった。私の研究者としての出発点が母校、熊本県立大学にあったことは間違いない。

◆ タイとの出会い

卒業論文以来、私は、タイの教育と開発をめぐる諸問題について研究している。この出発点は、学部2年生の夏。高埜健先生がコーディネイトされたアジア・太平洋諸国の大学生を対象とした短期の交流プログラム(JALスカラシップ・プログラム)への参加だ。これをきっかけにアジアを身近に感じ、自分の目で見てみたいという思いが強くなった。そして、その冬、日本語教育支援のボランティアとして、単身2ヶ月、タイ東北部の中等学校へ赴いた。これが生涯のフィールドにしたいと思うタイとの出会いであり、今の私の出発点だ。

◆ 「わかりたい」という感覚

タイをもっと知りたい、わかりたい、という強い思いが芽生え、いてもたってもいられなくなった私は、総合管理学部の諸先生方、また、環境共生学部、文学部の先生方にも教えを請うた。それまで勉強などしてこなかった私にも、先生方は優しく、時に厳しく、論してくださった。そして私は、研究の道へ進んだ。

それからは「知りたい、わかりたい」という一心で、無我夢中に駆け抜けてきた。今もなお、目の前にはわからないことが山のようにある。その山が高すぎて、愕然とすることもある。しかし、あの頃得た「知りたい、わかりたい」という感覚は、山を登る原動力となり、今も私を動かし続けている。



国際交流 INTER

🌐 学生交流協定の更新



平成26年5月28日、モンタナ州立大学ボーズマン校のクルザード学長が来学され、学術交流協定の更新を行いました。また、平成26年8月25日には、古賀学長がビルングス校を訪れ、ビルングス校ヌーク理事長とともに学生交流協定の更新を行いました。再締結で絆を深めたことにより、今後のモンタナ州立大学との交流がより活発になり、来年5月にはビルングス校からの短期研修団が本学を訪れ、ホームステイをしながら、日本語や日本文化を学び、本学学生と交流を深める予定です。

🌐 水銀研究留学生の入学



平成26年9月25日、熊本県立大学水銀研究留学生奨学金制度による奨学生2名が環境共生学研究科博士後期課程に入学しました。

入学した2名は、台湾・ベトナムの出身で、本学大学院と国立水俣病総合研究センターとが設置する連携大学院において、水銀に関する専門的研究を3年間行っていきます。

🌐 祥明大 schools への短期研修団の情報



平成26年9月18日、爽やかな秋空のもと、本学学生7名が祥明(サンミョン)大 schools の天安(チョナン)キャンパスに通う学生の家それぞれ1週間ホームステイするため、韓国の仁川(インチョン)空港に降り立ちました。

同大学への短期研修団派遣は、今年で15年目となりますが、滞在期間中、学術フォーラムへの参加、景福宮(キョンボックン)・民俗村の見学、日本語授業の参観など様々な体験や、ホストファミリーをはじめとする多くの人たちとの交流を通じて、韓国文化への理解を深めました。

🌐 第7回祥明大學校・熊本県立大学学術フォーラムの開催



平成26年9月19日、韓国祥明大學校において「人文学とイメージ」のテーマのもと、祥明大學校からヤン・ドングク、ジョン・ウィジンの両先生、本学文学部から難波准教授、米谷教授が、「人文学」の成立と今後の展望（難波）、アンドレ・ブルトンに見る原初芸術への関心とその意義（ジョン）、竹久夢二作品に見る韓国併合批判（ヤン）、江戸期の漢字字書に見る字体意識（米谷）について問題提起を行い、コメントーターを交えての活発な意見交換がなされました。意見交換は、研究や評価の手法に見る韓日比較といった視点にも及び、フォーラム後の懇親会終盤まで続きました。

🌐 国立台北科技大学との国際交流



平成26年9月22日から26日にかけて環境資源学科の石橋教授、小林助教、坂井助手、4年生から大学院生までの学生11名が台湾を訪問し、国立台北科技大学において学術セミナーを開催しました。

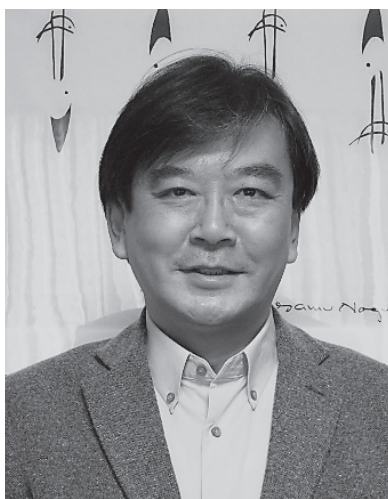
セミナーでは、水環境や環境影響評価等に関する最新の研究成果について両校の学生23名が英語で研究発表を行いました。セミナーや懇親会を通して両校の教員・学生間の親睦がさらに深まり、また環境学習や市内見学を通して台湾の文化、伝統を学ぶことができ大変有意義な交流でした。

🌐 東華大学との「台日連合田野調査」



平成26年8月20日から26日の間、環境共生学部居住環境学科の4年生6人と辻原准教授が台湾を訪問しました。国立東華大学台湾文化学系の郭俊麟先生の研究室の学生と日台混成の3班に分かれ、花蓮市の旧市街地に残る日本統治時代の建築物に関するフィールド調査を行って、観光地図を作成しました。

また9月1日には、東華大学の学生が本学を訪問し、さらに交流を深めました。互いになかなか言葉が通じないながらも、限られた時間の中で共同作業ができたことは大変貴重な経験となりました。



建築の意味

環境共生学部 居住環境学科

准教授 高橋 浩伸

(Hironobu TAKAHASHI)

Profile

九州大学(九州芸術工科大学)大学院芸術工学研究科博士後期課程修了。博士(工学)、一級建築士。
(有)木鶏建築研究所代表取締役を経て、2014年より現職。

はじめに

私は昨年まで、長崎県南島原市を拠点とした建築設計事務所を経営しながら、九州大学芸術工学部の大井研究室にて、住空間のデザインや建築美に関する研究を続けてきました。

ここでは、これまでの建築設計活動のご紹介と熊本県立大学における当研究室のテーマや研究内容をご紹介させていただきますと思います。

『大改造!!劇的ビフォーアフター』に出演して

私はこれまで、日曜日の夜に放送されるテレビ番組の『大改造!!劇的ビフォーアフター』に三回出演させていただきました。

この番組は、様々な問題を抱えた家が、「匠」たちのリフォーム術によって劇的に大変身するという謳い文句の人気番組です。

この番組で、経験させていただいたことは、「ものづくり」の楽しさと「建築の意味」でした。

建売住宅や工務店等が行う設計・施工一貫受注等を除く、注文住宅と呼ばれる住宅の建設(リフォーム等の改修工事も含めて)は、一般に我々建築家や設計者が、設計やデザインを行い、その図面を基に施工業者が工事を行います。この場合、工事の途中で図面を変更して工事を行うことは、コスト面や時間的制約等あり、あまり多くありません。しかし、この『大改造!!劇的ビフォーアフター』に関しては、設計デザインの段階から、施工の完成まで、“どうすれば、建て主様を「感動」させることができるのか?”ということを、「テレビの制作側」「設計者」「施工者」の3者がずっと考え取り組んでいくというものでした。

「ものづくり」の楽しさ

「発注者」「設計者」「施工者」が“建て主様を感動させる空間を創造する”という一点の目標に向かって住宅建設が行われるということは、今日ではなかなか実現できないことです。本来はそうあるべきであろうという考えを持っていたとしても、現実問題としての地方における経済の疲弊や経済第一主義的価値観では、多くの場合実現できないのが現状です。

このような中で私は、本来の「ものづくり」の楽しさ、醍醐味とも言える、“誰かを感動させる空間を創造する”という目標に向かって、共に感動できる仲間と仕事ができたとする経験は、何事にも代えがたいものとなりました。



テレビ番組「大改造!!劇的ビフォーアフター」撮影風景

「ABC テレビ 大改造!!劇的ビフォーアフター」

放映日:2010年9月

物件名:階段でごはんを食べる家

建設地:福岡県久留米市

「ABC テレビ 大改造!!劇的ビフォーアフター2009 春の2時間スペシャル」

放映日:2009年3月

物件名:玄関を裸で出る家

建設地:福岡県福岡市

「ABC テレビ 大改造!!劇的ビフォーアフター」

放映日:2003年12月

物件名:お風呂に階段のある家

建設地:長崎県佐世保市

「建築の意味」

このような経験から私は、なぜ建築を行うのか、何のための建築かという「建築の意味」について、“誰かを感動させる空間を創造する”ためだと考えるようになりました。

私は2014年4月から、熊本県立大学 環境共生学部 居住環境学科の教員に就任しましたが、授業やゼミにおいてもこのような内容の話をするようにしています。

研究室紹介

次にここでは、当研究室においてどのような研究や教育が行われているかをご紹介します。

当研究室では、人が『感動』したり、『幸福感』を抱ける空間を創造することを目的に、そのための設計デザイン手法の方法論やデザインの在り方の研究を行います。そのためにまず人間を知る必要があります。「人はどのように生活しているのか（生きているのか）」を知り、他者（それは家族であったり地域住民であったりしますが、これら）との関係性を学ぶことです。そして、人はどのように空間を認知し、評価しているのかという空間認知・環境評価の視点で空間・環境を見つめなおすことです。この2つの視点を通して、人間のための空間創造を考えていきたいと思っています。

具体的な研究テーマと研究実績

■建築美論

「美しい空間」を創造するための基礎的研究として現代日本人の美の階層構造究明やデザインコードとしての「美のチェックリスト」の創出を行う等、近代において喪失した美の規範に代わる21世紀的建築美論のあり方を研究しています。

「インテリア空間における美のチェックリストの創出」、「インテリア空間における美的価値観と評価構造」、「日本人の美意識に関する基礎的研究」

■建築・空間デザイン手法

「デザイナーの独りよがり」といわれる空間デザインではなく、人間中心のデザインを行うための方法論の研究を行うと同時に、ユーザーのニーズ把握の手法開発やニーズ調査によるデータの検討・分析等の研究を行っています。

「街路空間における道路平面形状の認識に関する研究」
 「キャプション評価法による景観調査における調査参加者の属性の違いと評価傾向」
 「インテリア・プレゼンボードの評価を通じた評価構造と個人属性の類型化」
 「インテリア・プレゼンボードにおける専門家と非専門家の見方の違いについて」
 「生活環境における「健康」のイメージ構造の抽出」
 「住宅建設における建て主のニーズ把握に関する研究」



高橋研究室ゼミ生による地域貢献研究のインタビュー調査の様子

■住環境デザイン

生活行為を想定した室内の光環境を調べ、最適で快適な住環境のあり方の研究を九州大学大井研究室との共同研究を行っています。

「The preference of living room lighting by LEDs」
 「Scale model experiments assuming residential houses」
 「生活行為を想定した室内照度・色温度の好ましさに関する模型実験」
 「住宅居間における照度・色温度の好ましさに関する蛍光灯とLEDの比較模型実験」



建築デザイン部の課題評価の様子

このように、3つの研究テーマを中心として熊本県立大学の学生たちと共に研究・教育を行う所存です。どうぞ皆様今後ともよろしくお願いいたします。

熊本県立大学国際シンポジウム「アジア太平洋の変動と日韓関係」開催!!



熊本県立大学では、本学の五百旗頭(いおきべ)理事長をコーディネーターとし、日韓の著名な研究者を招いて、「熊本県立大学国際シンポジウム『アジア太平洋の変動と日韓関係』」を開催、学生その他、一般からも多くの参加がありました。

○開催日時:平成26年8月10日(日)

午後1時半～4時半

○場 所:熊本県立大学大ホール

基調講演では、朴ソウル大学日本研究所長から、日本の世論が日中関係と日韓関係を同一視することのないよう日本側に求めるとともに、韓国側についても、過去の歴史を忘れないながらも未来的思考に基づいた日韓関係の構築を求める提言がありました。

続いて、パネルディスカッションでは、張東西大学総長から「両国の都市間連携を通じた日韓関係強化の重要性」を、小此木慶應義塾大学名誉教授から「これから両国新時代相互理解(和解)」を、若宮日本国際交流センターシニアフェロー、前朝日新聞社主筆から「民間活力による交流の大切さ」について発言がありました。

最後にコーディネーターである五百旗頭熊本県立大学理事長から、今後の日韓関係をますます強化していくには、歴史的な認識など相互の理解が重要であるとし、このようなシンポジウム等を介して、日韓双方が支え合いながらより良い方向に進んでいくことを希望するとの総括があり、盛会のうちにシンポジウムが閉会しました。



基調講演(朴ソウル大学日本研究所長)



パネルディスカッション(左から朴氏、張東西大学総長、小此木慶應義塾大学名誉教授、若宮日本国際交流センターシニアフェロー、前朝日新聞社主筆)

熊本県立大学売店がリニューアルオープン

この度9月22日から県立大学の売店が学生会館2階にリニューアルオープンしました。

売店を運営している丸善(株)さんは、1869年(明治2年)創業の日本最初の株式会社で、万年筆やバーバリーのコートなど日本初の輸入や洋書でもお馴染みです。全国の大学キャンパスに約100店舗ほど入店しており、教科書の販売はもとより、公務員対策の過去問題集や今年熊本県立大学100%合格率の管理栄養士国家試験の問題集など学生のニーズにあわせた品を取り揃えています。学食をご利用の皆さんをはじめ、たくさんのご利用をお願いします。



県立大学が五木村と包括協定を締結しました



平成26年4月25日(金)、熊本県立大学と球磨郡五木村が様々な分野での相互協力を目的とする包括協定を締結しました。本学との包括協定団体は、これで19団体となります。

この協定により、本学が有する様々なシーズを活用した教育研究活動や、村の豊かな自然環境をフィールドとした、学生の様々な活動が期待されます。

「英語合宿 English コレジオ2014」

9月1日(月)～9月12日(金)の土曜、日曜を除く10日間「Englishコレジオ2014」を開催しました。今年度は25名の学生が参加し、期間中は英語のみを使用するというルールのもと、講義やディスカッション、英語を使ったパフォーマンスなど様々なカリキュラムを実施しました。

前半の5日間は学内において講義等が行われ、また後半は、天草市の交流センター「ブルーアイランド天草」において、立命館アジア太平洋大学の留学生ら8名を交えて4泊5日の合宿を実施。留学生との交流を通して、外国と日本のものの見方や感じ方の違いを生で実感するなど、参加学生にとっては予定していたカリキュラム以上に充実した内容となったようです。



堤裕昭環境共生学部長、環境共生学研究科 博士前期課程 2年生 竹中理佐さんがダブル受賞!!

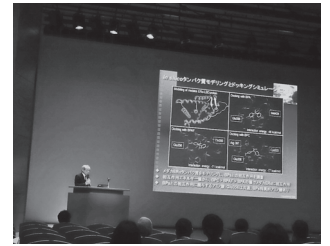
韓国済州島で開催された第2回アジア海洋生物学シンポジウム(平成26年10月1日~3日)において、本シンポジウムの開催及び運営に関する功績が認められ、AMBS2014の大会実行委員会から、堤環境共生学部長に対し、「Best Contribution Award」が授与されました。



また同シンポジウムにおいて、ポスター講演を行った約90名の若手研究者の中から、環境共生学研究科博士前期課程2年生の竹中理佐さんがYoung Scientist Awardに選ばれました(全受賞者は8名。うち日本からは竹中さんを含め2名が受賞)。

環境共生学部有菌幸司教授が 第23回日本環境化学会学術賞受賞!!

環境共生学部食健康科学科有菌教授が23回日本環境化学会において、環境化学物質群の生体(生態)負荷のレベルをより簡便かつ精度よく計測分析する手法を目指し、環境化学物質のモニタリングおよびスクリーニング手法の開発、内分泌攪乱作用機構解明および生態影響評価とDNAマイクロアレイ解析によるメダカ、アミ、センチュウ等発現遺伝子変動からの毒性影響評価に関する一連の研究「環境化学物質の生態影響に関する研究」により学術賞を受賞しました。



環境共生学部井上昭夫准教授が 「森林計画学賞」受賞!!

環境共生学部環境資源学科井上昭夫准教授が2014年3月「Allometric model of the maximum size-density relationship between stem surface area and stand density(樹幹表面積と林分密度との最多密度曲線のアロメトリックモデル)」の業績により、森林計画学会(1964年設立)から「森林計画学賞」を授与されました。



文学部飯村英樹准教授が 第5回JLTA最優秀論文賞受賞!!

2014年9月20日(土)に立命館大学びわこ・くさつキャンパスで開催された日本言語テスト(JLTA)第18回全国研究大会において、文学部英語英米文学科・飯村英樹准教授が第5回JLTA最優秀論文賞(タイトル:Attractiveness of Distractors in Multiple-Choice Listening Tests)を受賞しました。



この論文は、科研費基盤研究(C)(23年度~26年度)の成果をまとめたものです。多肢選択式テストにおける錯乱肢の機能を受験者の自信度の観点から分析し、テスト開発に新たな視点を提示したことが評価されました。

後援会便り



秘書技能検定対策講座を受講し、準1級合格の学生

後援会では就職対策事業の一つとして、資格取得を目的に、適当と認める講座を受講した場合に受講料の一部を助成、または資格を取得した場合や、英語検定等については獲得したスコアや級により報奨金の交付を行っています。この助成事業を活用し、自分のレベルアップを図ることはもちろん、就職活動での自己PRとなるように、どんどんトライして欲しいと思います。

後援会とは

- 本学学生の保護者又はこれに準ずる方を会員として組織されています。
- 大学の教育事業を後援し、大学と家庭及び社会との協力によって、大学教育の成果を上げることを目的としています。

後援会の事業

次の4つの事業を中心に学生の活動全般を支援しています。

《就職対策事業》

- 就職対策講座(公務員試験対策講座、就職活動実践講座、ITパスポート試験対策講座、二級建築士受験対策講座、秘書技能検定対策講座等)受講料の一部助成又は開催経費の一部助成
- PROGテスト(社会人基礎力の測定)の実施支援、TOEIC®IPテスト開催の支援及び受検料の一部助成、各学部による就職支援事業開催経費の一部助成、資格取得者への助成 等

《教育研究助成事業》

- 共同自主研究への助成
- 国内学生大会等出動経費の一部助成 等

《国際交流推進事業》

- 海外留学・研修期間に応じて渡航経費等の一部助成
- 留学対策講座の受講料の一部助成
- 英語合宿開催経費の助成 等

《学生活動支援事業》

- 各サークルの活動費・白晝祭開催経費・全国大会出場経費等の一部助成
- 学生用コピー機の設置、コピーカード販売
- 学生のリクエストに応じ図書を購入し図書館へ配置 等

※新入生へは、本学合格通知の際に、後援会の説明及び入会・会費納入のお願いをしております。まだ未加入の方は、充実した学生生活を送るためにも後援会事業をご理解いただき、是非ご加入ください。途中年次であっても随時入会を受け付けています。



熊本県立大学飯村研究室 ムービー制作部「彩」

<http://www.pu-kumamoto.ac.jp/~iimulab/movs/>

——ムービー制作部「彩」は、飯村研究室の有志を募り、研究活動の一環として2013年7月に発足しました。地域社会や企業が抱えている課題を「映像」というメディアを介して解決すること、そして個々の頭の中の考えやアイデアを他人に的確に伝えるチカラを涵養することを目的として活動しています。また、メンバーのほとんどが映像制作に初めて携わるという、ゼロからのスタートでした。だからこそ、個々の技術向上だけでなく、チームプレーを通して様々な経験を積み、成長することも大切にしながら、日々活動しています。

Ⅰ 熊本電気鉄道株式会社様との協同制作

熊本電鉄の電車の乗り方や、車内に自転車を持ち込めるなどの特徴が、熊本電鉄を普段利用しない人にあまり知られていないという課題を解決するために、それらを紹介する映像を制作しました。熊本県のゆるキャラ・くまモンと5歳の男の子が出演する親しみやすい映像は、動画投稿サイトYouTubeで公開から約4ヶ月で再生回数3万回以上を記録しました(2014年10月時点)。



撮影した映像を現場で確認している様子(堀川駅にて)

Ⅰ 人間ドック紹介映像の制作

日本赤十字社熊本健康管理センター様のご協力の下、若年層への健康啓発を目的とした人間ドック紹介映像を制作しました。若年層に人気のある熊本城おもてなし武将隊の方々にキャスティングし、人間ドックを疑似体験するというコメディタッチなストーリーに仕上げました。



関係者らを招いて開催された完成披露試写会にて



総合管理学部総合管理学科 情報管理コース
飯村研究室 4年

岩下 明日香

<http://www.pu-kumamoto.ac.jp/~ilab/>

Ⅰ コンテストでの受賞実績

- 第11回KABふるさとCM大賞(一般の部)
「ふるさとと生き続ける満願寺温泉」…………… 金賞
- 第3回日本ユニセフ協会One Minute Videoコンテスト
「Can you see them?」…………… 最優秀賞
「@earth」…………… 入賞

自分たちの制作した映像が外部からどのように評価されるのかを試す意味で、定期的にコンテストに挑戦しています。第11回KABふるさとCM大賞では、南小国町の満願寺温泉をPRするCMが一般部門で金賞を受賞し、実際にCMとしてKABで放映されました。また、公益財団法人日本ユニセフ協会が主催する、第3回One Minute Videoコンテストでは、応募した2作品ともに、全応募作品429件のうち上位30位以内にランクインし、うち1作品は最優秀賞を受賞することができました。最優秀賞の作品は、日本代表として世界大会に出品されました。



One Minute Videoコンテストの表彰式にて

Ⅰ 今後の活動について

これからの取り組みとしては、交通安全啓発を目的とした熊本県警察との協同制作や、2回目の挑戦である第12回KABふるさとCM大賞への応募などを予定しています。今後も、より多くの人の心に届くような映像を制作していけるよう、メンバー全員が一丸となって頑張っていきたいと思います。



映像の視聴はコチラ→

ムービー制作部「彩」公式チャンネル



熊本県立大学未来基金へのご協力に、心よりお礼申し上げます。

熊本県立大学未来基金につきましては、平成26年3月1日から8月31日までの間に、延べ個人7名の皆様から総額1,265,000円のご寄附をいただき、これにより平成21年9月8日設立以来の基金総額は、104,257,255円(申し出分を含む)となりました。平成26年度は、新たに「熊本県立大学短期派遣留学生支援奨学金制度」を創設し、本学からの派遣留学生の増加と国際交流の推進を図り、また、若手教員や女性教員を対象としたサバティカル研修(*)への助成制度を設けました。

ご寄附をいただきました皆様に感謝し、ここにご芳名を掲載させていただきます。

1. ご寄附してくださった方

(敬称略にて掲載させていただきます。)

【個人】

100万円 五百旗頭 真

2. お名前のみ掲載を希望された方

(五十音順、敬称略にて掲載させていただきます。)

【個人】

井上 昭夫

田代 裕信

桑原 さやか

弓掛 邦彦

熊本県立大学 未来基金

皆様からのご協力、ご支援を
お願い申し上げます。

※お名前・寄附金額の掲載を希望されなかった方 個人2名

(*) サバティカル研修・・・教育研究能力向上のため、国内外の大学等で、一定期間、学術研究等を行おうとする教員に対し、本学教員としての職務を免除する制度。

名誉教授の称号授与(平成26年6月16日授与)

村上 良知氏

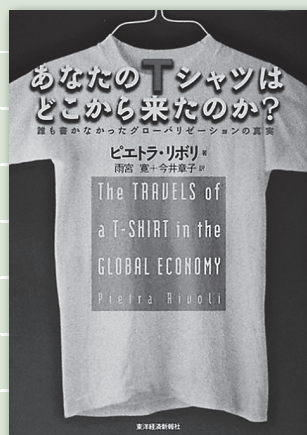
(元環境共生学部教授、専門分野:建築学)

松野 了二氏

(元総合管理学部教授、専門分野:情報科学)

おすすめの1冊

「あなたのTシャツはどこから来たのか?
—誰も書かなかった
グローバルゼーションの真実」



著者/ピエトラ・リボリ(訳:雨宮寛、今井章子)

グローバルゼーションを、国家や制度などの広く大きな視点で捉える本は数多くあるが、スケールが大きすぎる、あるいは予備知識が必要で、とっつきづらいと感じる人も多い。この本は、誰もがほぼ間違いなく持っているであろう「Tシャツ」という身近な商品が、実は世界を駆け巡っている、という事実からグローバルゼーションを考える。

筆者が手に入れたTシャツの、原料はどこで作られた?加工は?不要になったらどうなっている?全ての流通プロセスを丁寧に取材し検証することで、まるでTシャツの一生を追いかけているような物語性と、その局面ごとのグローバルゼーションの歴史や議論を同時に体験できる貴重な一冊である。

この本を読んだあと、身近なモノを何か手に取り、その「一生」をぜひ想像してほしい。



総合管理学部総合管理学科
講師 本田 圭市郎

熊本県立大学 アーカイブズ

「平田篤胤 案山子画讃」

一軸 縦九五cm×横二八cm 絹本 墨画

(弥富破摩雄文庫蔵)



古語云此神者足雖不行
盡知天下之事神也

あさゝか倭事此あさゝかは

天の下地

物識人やあさゝか

知るまゝ

平篤胤謹画咏

平田篤胤(一七七六〔安永五〕年〜一八四三〔天保一四〕年)は秋田出身の国学者・思想家。人間は死後、^{おおくにぬしのかみ}「幽冥」に行くと言主張するなど、独自の神道思想を打ち立てたことでも知られる。秋田藩士大和田氏の子として生まれたが、脱藩して江戸で学問に励んだ。後に備前松山藩士平田篤穂の養子となり、平田姓を名乗るに至る。

案山子の画の上に、讃「古語云 此神者足雖不行 尽知天下之事神也」まさしかる 事のしるしは 天の下 物識人やとひて知らまし、右に「平篤胤謹画咏(花押)」。「此神者く神也」は、『古事記』上巻で、誰も知らなかった少名毘古那神の正体を大國主神に教えた久延毘古^{くえびこ}に関する部分で、原文では「於今者山田之曾富騰者也(今にいう山の田の案山子^{そほと}へ 曾富騰^{そほと}ぞ)」に続く一節である。足で歩くことはしな

いが天下を知悉している神とされる案山子を、篤胤は学問の神として崇め、時に自らと重ね合わせることもあった。この画題による遺品が本作以外にもいくつか存する所以である。

すでに没していた本居宣長の著作に感激するや、宣長の息である本居春庭に、夢で宣長と師弟の契りを結んだとする書簡を送って入門を依頼するなど、篤胤のひととなりを伝えるエピソードは少なくないが、旧蔵者の弥富破摩雄はこの画を「此れは晩年ので、余程落付きがあり、潤ひがある。よく言へば重厚であるから、画としての軽妙の点は見出されぬ。併し絵として見ても、(上田)秋成のよりは優つて居る」(『近世国文学之研究』四二七頁)と評した。

解説…文学部 日本語日本文学科 教授

米谷 隆史

「春秋彩」へのご意見・ご感想をお待ちしています。

本誌についてのご意見・ご感想を下記までお寄せください。
いただいたご意見は、今後の広報紙編集の参考にさせていただきます。

〒862-8502(住所記載不要)

熊本県立大学企画調整室「春秋彩」担当行

FAX 096-384-6765 E-mail kikaku@pu-kumamoto.ac.jp

発行：熊本県立大学

〒862-8502 熊本市東区月出3丁目1番100号

TEL 096(383)2929(代)

http://www.pu-kumamoto.ac.jp/

再生紙を使用しています

PRINTED WITH
SOYINKTM
この印刷物は大豆インキを使用しています